

# 《京都》御所と離宮の葉しおり



其の二

## — 京都御所 —

### 紫宸殿しころの鑿屋根



紫宸殿正面(南庭側)



紫宸殿北側

内裏の正殿である紫宸殿は、東西約33メートル、南北約23メートル(簀の子縁を除く)、屋根は東西約44メートル、南北33メートルにも及ぶ大きな建物で、即位礼をはじめとする儀式に使われました。正面中央に十八段の階段があり、その東に左近の桜、西に右近の橘が植えられています。

紫宸殿の屋根は、桧皮葺きで入母屋造りですが、よく見ると途中で段差がついています。この屋根形状はかぶと 兜などの鑿しころ (兜の左右と後方に垂らす首の防御の部分) が付いているのに似ていることから「鑿屋根」とよばれています。珍しい形式ですが、古い例では法隆寺の玉虫厨子があります。

屋根には五本の縦筋が見えます(左記写真参照)が、屋根上で作業する時に使用する力鎖ちからくさりと、雷を受けたときに電流を流すためのアース線がここにあります。

 マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

 マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

 マークは、春と秋には申込みが必要のない一般公開の際にご覧になれます。下記にて日程等をご確認ください。 <http://www.kunaicho.go.jp/event/kyotogosho/kyotogosho.html>

 マークは、通常公開していない場所にあります。

# 《京都》御所と離宮の葉しおり



其の四

## — 京都御所 —

さこん  
左近の桜



桜の名所や名木は日本各地にあります。京都御所紫宸殿南庭にも「左近の桜」という有名な桜があります。

この桜の起源については、平安遷都のときに植えた梅が承和年間(834-848)に枯れたため仁明天皇(在位833-850)が桜に改め植えられたものと伝えられていますが、朝廷の編纂した日本三代実録の貞観16年(874)8月24日の条に、京の内外に大きな被害をもたらした大風雨が「紫宸殿前桜」他の名ある木を吹き倒したことを記載しており、その頃には確かに植えられていたことがうかがえます。

現在の左近の桜は、安政内裏(1855年竣工)からは3代目で、平成10年に移植したものです。移植時は樹齢約40年でしたので、今は50年を過ぎたこととなります。

左近の桜は、毎年4月春の一般公開前後に花を咲かせます。品種はヤマザクラで、葉芽と花が同時に開きます。

下の写真は、先代・先々代の左近の桜です。右下の先代の写真は、移植後1年目(当時推定樹齢15年)に撮影されたものです。



先々代左近の桜 大正12年4月5日撮影



先代左近の桜 昭和5年4月8日撮影

マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

マークは、春と秋には申込みが必要のない一般公開の際にご覧になれます。下記にて日程等をご確認ください。ようお願いします。<http://www.kunaicho.go.jp/event/kyotogosho/kyotogosho.html>

マークは、通常公開していない場所にあります。

たちばな  
右近の 橘



「左近の桜」は、《京都》御所と離宮の葉其の四で紹介しましたが、今回は「右近の橘」を紹介します。

右近の橘は左近の桜と対で、紫宸殿南庭西側に植えられています。

現在京都御所に植えられている右近の橘は、それまで植えられていた右近の橘が安政5年(1858年)に枯れたため、当時京都御所東側にあった学習院(開設当初(弘化4年・1847年)は学習所と称す)に植えられていた橘を移植したものです。

樹齢が170年以上を経過しているため、やや弱ってきているので、花が咲き実をつけると木に負担がかかるため、できるだけ花を摘み取っています。



昭和2年7月23日に撮影された右近の橘  
(京都事務所保存のガラス乾板より)



現在の右近の橘



橘の実



橘の花

橘はミカン科の常緑小高木で、6月頃に白い花弁を5枚つけ、7月頃に2~3cmくらいの黄色い実をつけます。味は酸味があります。

因みに毎年11月に天皇陛下から親授される文化勲章のデザインは、勲章には橘の花が、鈕(勲章と綬のあいだにあるもの)には実と葉が使用されています。



即位の礼（御物 『明治天皇紀附図』）

明治元年8月27日（1868年10月12日）、紫宸殿において明治天皇の即位の礼が行われました。即位は皇位につかれることですが、踐祚の後に改めて皇位の継承を天下に宣するものとして、即位の儀式が行われてきました。

古来より唐風の儀礼で行われてきた儀式でしたが、復古維新に際して、時代にふさわしい儀式の在り方が模索されます。その結果、装束や式場の装飾を和風に改め、神事の作法を含む式次第に変更するとともに、世界に見分を広めることを表明するため地球儀を用いるなど、従来の儀式とは異なる形式に改められました。

また、儀式当日は東北地方での戦闘の最中にあり、経済面や準備日数の制約により、調度類の新調を最小限におさえる方針であったことも、明治天皇の即位の礼を特徴付ける一因となりました。例えば、嘉永の大火（嘉永7年<1854>）により焼失していた高御座<sup>たかみくら</sup>は、即位の礼における天皇登壇の舞台として最も重要な調度ですが、儀式に際して新調されることはなく、紫宸殿常設の御帳台をその代用とされています。

儀式では、新たに武士を含む百官が威儀を正して承明門<sup>じょうめいもん</sup>の左右の扉から入り、各々所定の位置に就きました。続いて、天皇が黄櫨染御袍の束帯姿で清涼殿から紫宸殿に渡御し、母屋の中央に置かれた高御座（御帳台）に出御されると、百官による拝礼が行われました。続いて、即位を天神地祇に告げる奉幣、即位の詔の読み上げ、諸臣による祝賀を表す寿詞の奏<sup>よごと</sup>などが行われ、再び拝礼が行われました。

儀式当日は前日の雨により庭上が湿っていたため、雨儀の礼を用いられ、庭上の配置は屋根のある回廊や門に変更されました。

『明治天皇紀附図』には、実際に行われた雨儀が画かれているのに対し、『帝室例規類纂』（宮内公文書館所蔵）所収の「御即位図」は、本来の晴儀が画かれています。

京都御所では、明治天皇以後、大正天皇、昭和天皇の即位の礼が行われました。明治期に、伝統と革新の調和を目指して歴史の再解釈が試みられた儀式は、時代を反映しかたちを変えながら、今に継承されています。



『御即位図』（『帝室例規類纂』巻四 附録）

（宮内公文書館所蔵）

「京都御所 宮廷文化の紹介」<平成30年秋>にて、ここで紹介した『明治天皇紀附図』の写真を回廊、『御即位図』と地球儀の写真を大臣宿所に展示します

# 《京都》御所と離宮の葉(おり)

其の十二



## — 京都御所 —

100年前に行われた大正天皇御大礼

平成27年京都御所春季一般公開では御大礼に関連する展示をします。

京都御所春季一般公開

平成27年4月3日(金)～7日(火)



大正天皇即位礼当日紫宸殿の儀 だんてい 南庭の様子

『大礼記録』大礼記録編纂委員会編(大正8年)(国立国会図書館デジタルコレクション)

今から100年前の大正4年(1915)に京都御所などで大正天皇御大礼の諸儀式が行われました。一連の儀式は、4月19日の賢所に期日奉告の儀に始まり、京都では11月10日即位礼当日賢所大前の儀(京都御所春興殿)、同紫宸殿の儀(京都御所紫宸殿)※、11月14日大嘗宮の儀(仙洞御所跡敷地)、11月16,17日即位礼及び大嘗祭後大饗の儀(二条離宮。現在の二条城)、11月25日明治天皇山陵に親謁の儀(伏見桃山陵)、11月26日孝明天皇山陵・仁孝天皇山陵・光格天皇山陵に親謁の儀(後月輪東山陵・後月輪陵)などが行われました。

貞明皇后(大正天皇の皇后)は、時を同じくして第四子を御懐妊中であつたため、一連の儀式には御出席されませんでした。その後12月2日にお生まれになったのが、今年で満100歳になられる三笠宮崇仁親王殿下です。たかひと



現在の紫宸殿内の高御座

また、通常御大礼行事に御参加になる皇族は、成年皇族となっているところ、当時皇太子殿下(後の昭和天皇)は14歳ではありましたが、大正天皇の御沙汰により即位礼当日の儀式のみ御参列になりました。

※は現在の京都御所紫宸殿で執り行われ、高御座(写真:左)はその時造られたものが、昭和天皇(昭和3年)、今上陛下(平成2年)と3回にわたり使用されました。

# 御即位で使用されるばん 殿 旛

(こちらで写真掲載した旛は昭和天皇御即位に使用したものです)

写真掲載している旛は以下のとおり展示します。  
 京都御所春季一般公開  
 平成27年4月3日(金)~7日(火)  
 大臣宿所

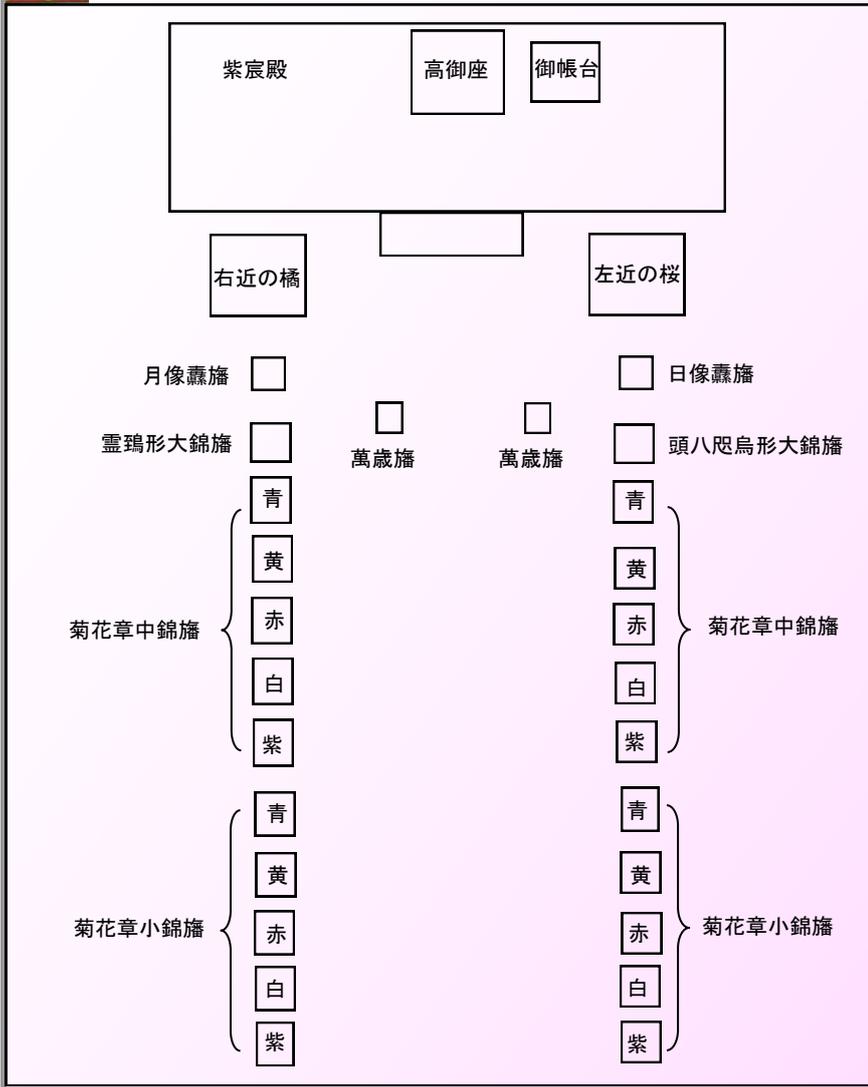
即位礼の紫宸殿の儀では、前庭(京都御所では南庭)に大錦旛を始めとする調度品が並びます。

それらの旛(はた)は、登極令(明治42年公布 元号制定、即位礼などを規定した旧皇室令)により左記図のように配されました。

左近の桜より南には、日像にっしょうとうばん 旛、次にやたがらすたいきんぼん 頭八咫鳥形大錦旛、菊花章中錦旛・小錦旛ちゅうきんぼん しょうきんぼん 各5旛(青・黄・赤・白・紫)が並びます。左近

の桜に相対し右近の橘の南側にはげっしょうとうばんれいし 月像げっしょうとうばん 旛、霊鷲形大錦旛、菊花章中錦旛・小錦旛各5旛が同じく並びます。

日像旛は赤地の瑞雲の錦に金糸で日像を刺繍した旛で、月像旛は白地の瑞雲の錦に銀糸で月像を刺繍したものです。旛は竿に掛けられ、竿の頂にはふし 纒形(被髪状の飾り)を据えます(下記写真:左端の旛(日像旛))。



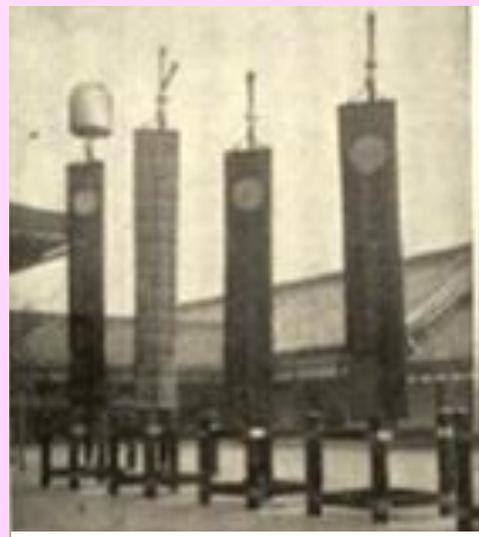
紫宸殿南庭庭上に並べられる旛の配置



げっしょうとうばん  
月像旛



にっしょうとうばん  
日像旛



『昭和大礼要録』大礼記録編集委員会編  
 昭和6年(国立国会図書館デジタルコレクション)

頭八咫鳥形大錦旗(写真:上段右)  
は、五彩瑞雲の赤地錦の旗の上方に  
頭八咫鳥が刺繍されています。この頭  
八咫鳥は神武天皇が東征の際、熊野  
から大和への道を先導した大きな鳥と  
されています。

れいし  
霊鷲形大錦旗(写真:上段左)は、五  
彩瑞雲の白地錦の旗の上方に金鷲が  
刺繍されています。金鷲は神武天皇が  
東征の際、神武天皇の弓に止まると、  
体が光り輝いたと伝えられています。



れいし  
霊鷲形大錦旗



やたがらす  
頭八咫鳥形大錦旗



ばんざいばん  
萬歳旗は儀式の際に東西に  
ある大錦旗の内側に置かれま  
す。赤地雲形文錦に、上方に  
は魚といつへ巖瓮が刺繍され、その  
下には金糸で「萬歳」と刺繍さ  
れています。

巖瓮は祭祀に用いられる神  
酒を入れる土器で、神武天皇  
が東征の際に巖瓮を川に沈め  
て占ったという故事により瑞祥  
のしるしとして表現されていま  
す。

ふしみのみやさだなる  
この「萬歳」という文字は、大正の御大礼では伏見宮貞愛親王殿下、昭和の  
御大礼では閑院宮載仁親王殿下の御染筆が刺繍となっています(写真:下段  
右)。

なお、大正天皇と昭和天皇の御即位では、同じ意匠の旗を使用しました。今  
回写真掲載した旗は昭和天皇御即位で使用したものです。



ばんざいばん  
萬歳旗

# 即位の礼で使用された調度類

## 明治天皇の即位の礼で置かれた獅子・狛犬像



「即位礼」猪飼嘯谷筆 聖徳記念館絵画館所蔵

※画像の無断複製や二次使用を禁じます

獅子・狛犬像一对と、下部の浜床に麒麟の絵(東面)が確認できる

(左)狛犬像(右)獅子像 木造彩色

明治天皇の即位の礼については、「[栞其の二十](#)」でも取り上げていますが、今回は使用された調度類のうち、玉座に置かれた獅子・狛犬像と、浜床の側面に画かれた鳳凰と麒麟の図について紹介します。

この獅子・狛犬像は、明治天皇の即位の礼で、天皇の座の前に並んで置られました。獅子と狛犬は、宮中では古くから魔除けの意味合いや、玉座を護る役割をもっていたとされています。『枕草子』や『うつほ物語』などの平安文学には、宮中の御帳台の四隅に置かれ鎮子として使用されたという記述があることや、今も京都御所には紫宸殿の賢聖障子の中央に画かれた獅子・狛犬、清涼殿の御帳台前に置かれる獅子・狛犬像([栞其の五](#))などが残っていることから、その結びつきは深いものといえます。古くは大儀の際に平安宮大内裏の朝堂院の中門であった会昌門の前に、狛犬のモデルとも言われる牛のような一角獣「兕」の像を置いたことや、即位の儀式の際に承明門の前に金属製の銅犬一对が置かれたこともありました。

両像とも台座は木地長方形入隅で、漆箔が押されています。獅子は口を開け、巻毛のたてがみと火焰型の尾には胡粉下地の上に緑青地、その上に金泥で毛並みが描かれ、体軀は漆に金箔が施されています。狛犬は口を閉じ、金色の一角をもっています。たてがみと尾は胡粉下地の上に群青、さらに金泥で毛並みが描かれ、体軀は、変色していますが元は銀色であったとみられます。



獅子像は、緑青に金泥で毛並みが描かれる

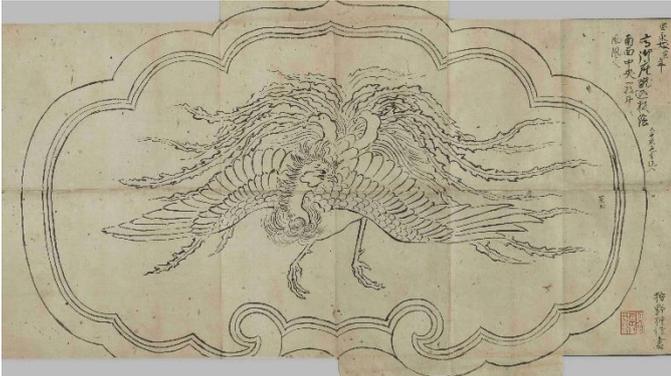


体軀には筋肉や骨格がありありと彫刻されている

ほうおう きりん  
鳳凰・麒麟の図



図① 明治天皇の即位の礼ご使用 浜床南面中央 鳳凰図



図② 『内裏高御座蹴込板図(宝永7)』  
(都立中央図書館特別文庫室所蔵)  
※画像の無断複製や二次使用を禁じます。  
(内題)「宝永七寅年 高御座蹴込板繪 南面中央一枚斗 鳳凰也 狩野種信畫」



図③ 大正天皇の即位の礼で製作 浜床南面中央 鳳凰図  
梅戸在貞 筆



明治天皇の即位の礼ご使用 浜床北面中央 鳳凰図

明治天皇の即位の礼で使用された御帳台の浜床の側面には、鳳凰と麒麟の絵が並んでいます(2頁の「即位礼」図参照)。浜床とは、玉座を据えるための方形型の台のことをいいます。東西南北の各方角に3面ずつ、合計12面の絵が配置されています。鳳凰の絵は南面と北面の中央に1羽ずつで合計2羽、麒麟はその他の面を飾り全部で10頭を数え、それぞれの場所によって顔の向きや体の色、表情が異なります。鳳凰と麒麟は、すぐれた天子が世の中を治めるときに現れる瑞鳥・瑞獣とされ、天皇が即位の礼で着用される黄櫨染御袍にも文様として織り出されています。

明治天皇の即位の礼で使用された絵(図①)の作者は今のところ明らかではありませんが、宝永7年(1710)中御門天皇の即位の儀式で使用されたもの(図②)は狩野派の絵師狩野種の信(1666-1739)が類似の構図で画いていることがわかっており、同派に近い作者のものと考えられます。この鳳凰と麒麟が四方を護る図様は現在の高御座と御帳台の浜床にも受け継がれています。現在の高御座と御帳台は、大正天皇の即位の礼に際して製作されたもので、浜床の鳳凰と麒麟の図(図③)は梅戸在貞(1883-1964)が画いています。外枠の形はやや横方向に長くなっていますが、絵の構図や配色は前の時代のものを参考にしたとみられます。梅戸在貞はこの鳳凰・麒麟の図を代表作としたことから、麒麟庵と号しました。

各時代の鳳凰の共通点は、浜床南面の鳳凰は顔が右を向き尾羽は白色、北面の鳳凰は顔が左を向いていて、尾羽は緑色です。宝永7年の鳳凰には彩色がありませんが、他が片羽と脚を上げているのに対し、両羽と脚を下ろした構図になっています。

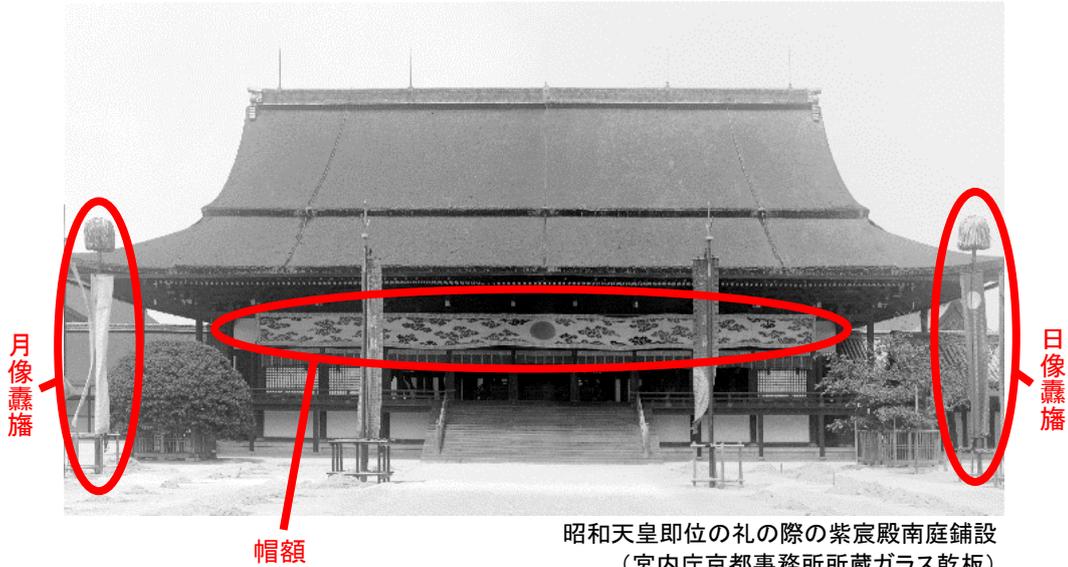
今回の展示では、明治天皇の即位の礼で使用された浜床の絵のうち、北面の鳳凰・麒麟の図3面を展示します。



高御座 浜床南面 鳳凰・麒麟図

も こう にっしょう げっしょうとうばん  
**帽額、日像・月像麩旛**

京都御所で行われた大正天皇・昭和天皇の即位の礼では、紫宸殿とその南庭に多くの調度品が鋪設されました。現在も京都御所に伝わるもののうち、帽額と日像・月像麩旛について紹介します。



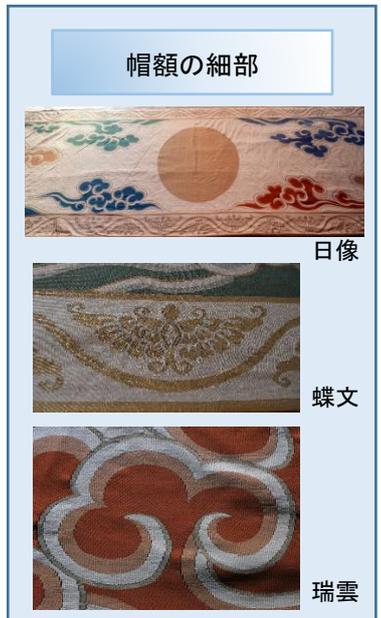
昭和天皇即位の礼の際の紫宸殿南庭鋪設  
 (宮内庁京都事務所所蔵ガラス乾板)

帽額は、帳や御簾の懸け際に飾るための水引幕の一種で、長押の上方に懸けられます。古くは大極殿、そして紫宸殿で行われた儀式の際に用いられました。孝明天皇以前の即位の儀式では唐風色の強い、霊獣と瑞雲を配した獣形帽額と呼ばれるものが使用されていましたが、明治天皇の即位の礼では帽額は使用されず、大正天皇の時には霊獣が除かれ、金色の日像に五彩の瑞雲、輪郭に蝶文の新たな意匠が採用されました。このときに製作された帽額は昭和天皇の即位の礼でも使用されました。

この帽額は、丈が156cm、幅は2750cmの長大な織物です。意匠は綴織で表現されています。綴織は長い歴史を持つ平織の織物の技法の一つで、古くは法隆寺や正倉院の飛鳥・奈良時代のものが伝わります。本品は、強く張った経糸に多色の緯糸を意匠匠の配色に合わせて同色の区画内を往復しながら織り嵌め、絵画の様に表されています。細部には金糸や銀糸が使われ、華麗で美術的な織物です。また、綴織の中でも密度の細かい文様を織り出すところは爪織と呼ばれる技法で行われます。爪織は、織手の爪の先を鋸の刃のようにギザギザにカットし、緯糸を一本一本爪で搔き寄せて織り込んでいく非常に手の込んだものです。

綴織は織下絵と呼ばれる、いわば設計図である図案が重要となります。この帽額の原画は原在泉(1849-1916)が担当しました。在泉は、京都御所にも多くの障壁画を残している原在照(1813-1877)の養子で原派の四代目にあたります。原家は有職故実に精通し、宮中の儀礼に関わる絵画などを多く画いていました。在泉自身も、京都御所の中では迎春(御常御殿の北側に位置)北取合の間に「四君子」の障壁画を画いています。

麩旛とは、竿頭に飾りのある旛のことをいいます。儀式の際に庭上に立てられたもので古来中国の麩形は牛や馬の尾の毛を束ねたものでしたが、大正天皇の即位の礼では、細長い麻布に漆を塗り、金箔を押したもので作られました。日像の旛は赤地瑞雲の錦に金糸で日像を、月像の旛は白地瑞雲の錦に銀糸で月像を刺繍しています(その他の旛や庭上での配置については、[栞其の十二](#)を御覧ください)。京都御所に伝わる日像麩旛・月像麩旛は、昭和天皇の即位の礼に際して製作され紫宸殿南庭に立てられたもので、左近の桜の南に日像麩旛、右近の橘の南に月像麩旛が配置されました。



# 《京都》御所と離宮の葉(おり)



其の十四

## — 京都御所 —

たかみくら

### 高御座 — 古代より継承されてきた特別な御座 —



高御座

(上: 全体写真, 下: 上部部分写真)



京都御所の正殿である紫宸殿の母屋中央には、高御座が置かれています。高御座は、奈良時代以来、即位式や朝賀などの重要な儀式に用いられてきた天皇の御座です。現存の高御座は、今から百年前の大正4年(1915)11月10日の大正天皇御即位式に際して新造されたものです。昭和天皇と今上陛下も、即位式にはこの高御座にご登壇になり、今上陛下の即位式の際には、京都御所から皇居宮殿に移送して用いられました。高御座は、古代から現代に至るまで、大切に使い継がれてきた調度なのです。

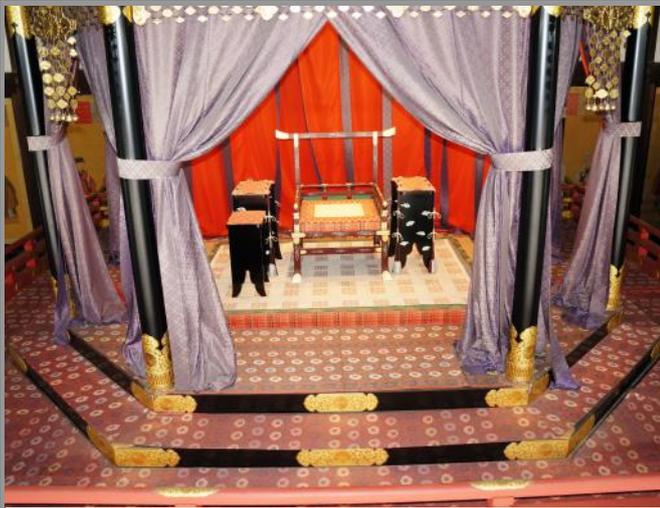
高御座は、南を向き、四角形の浜床の上に、八角形の壇(てんがい)(二段)を重ね、その壇上に柱を立てて、天蓋を支えるつくりになっています。

高御座の特徴である八角形については、おおやしまくに やすみ「大八嶋国」,やすみ「八隅」と呼ばれた日本の国土をあらわしているという指摘があります。

高御座の上には、頂上に大鳳一つ、八方に小鳳が載ります。天蓋のまわりには瑞雲が画かれ、その上には大小の鏡はくぎよくと白玉を入れた八花形が並びます。なお、鏡には周囲に十五本の光芒があり、日形ともこうぼう

ごいし 呼ばれました。天蓋裏の中央(御椅子の真上)だいえんきょうにも、大円鏡といわれる鏡があります。

天蓋の八方の先端にある藤手には玉旛ぎよくぼん(金物製の旗)をつり下げ、柱間には帽額もこう(帳の掛け際の装飾)を掛けます。玉旛と帽額には、金色の文様飾りの間に、五色(白(透明)・黄・赤・緑・青)の小さな玉が配されています。五色の玉や日形および鳳凰は、天皇が即位などの儀式の際に身につけた冕冠べんかん(江戸時代以前、礼服を着用する際に使用された唐風の冠)にも用いられており、重要な儀式には欠かせない装飾であったとみられます。



高御座帳内の様子

とばり ふかきむらさきいろこあおいがたのあや ひいろのはく  
 柱間には帳(表: 深紫色小菱形綾, 裏: 緋色帛)を掛けま  
 うんげんべり やまとにしきべり  
 す。帳内には, 天皇の御座として, 纏縹縁畳二帖, 大和錦縁  
 りゅうびんのつちしき やまとぜいきんのたんたい どうぎょうきのたんたい  
 龍鬘土敷一枚, 大和軟錦毯代一枚, 東京錦毯代一枚を重ね  
 とりいしきちよくほうけいもく ろういろ  
 て敷いた上に, 鳥井式直方形空目蠟色塗り螺鈿入りの御椅子  
 を立てます。御椅子の座面上には, 纏縹縁の畳と白地菱文の  
 おしとね  
 御茵を重ねます。これだけの敷物を重ねられることは大変珍し  
 く, 伝統的な御座のあり方を考えるうえで, 重要な特徴であると  
 いえます。御椅子両側には剣璽案(向かって右に剣, 左に勾  
 玉)があり, その手前に御璽・国璽を置くための案があります。



敷物の様子



敷物詳細

(左より東京錦毯代, 大和軟錦毯代, 大和錦縁龍鬘土敷)

高御座に関する記録は, 天平16年(744)までさかのぼります。高御座は大極殿(大内裏の中心である朝堂院の正殿)での儀式の際に置かれていました。12世紀後半における大極殿の焼失後, 大極殿の儀式は紫宸殿等で行われるようになり, 高御座も建物の大きさに合わせて浜床を小さくするなどして, 紫宸殿等に置かれるようになりました。高御座の形式について詳しい『延喜式』(平安時代中期の法典)以降の史料を確認すると, 装飾の数や浜床の大きさなどに変動があるものの, 基本的なかたちに大きな変更が加えられることなく現在に至ることがわかります。このように古来からの形式が継承される一方で, 座具には変化がみられます。上記の史料によると, 即位式等の儀式における高御座の御座は, 平敷(床座)であったと解されます。例えば, 『延喜式』には上敷両面二條, 下敷布帳一條と記され, 平安時代末期の儀式装束を示す『文安御即位調度図』にも纏縹端大帖一帖, 唐錦端龍鬘, 唐軟錦端茵, 東京錦茵を敷き重ねると記されています。また, 江戸時代の『後桜町院天皇宸記』には, 畳二帖と茵三枚を敷くことや, 平敷の高御座にご登壇になる際の所作について記されています。大正時代以降, 即位式において高御座に御椅子が立てられるようになりました。現存の高御座は, 一代一度の即位式に用いられる御座として, 古来からの伝統を継承しつつ, 時勢に応じた変化が加えられた特別な調度なのです。

今回紹介した鏡(日形), 帽額, 剣璽案, 敷物(東京錦毯代ほか)を以下のとおり展示します(大正天皇御即位式使用)。  
 京都御所秋季一般公開  
 平成27年10月30日(金)~11月3日(火・祝)  
 於: 大臣宿所(P8地図参照)



じょうめいもん

ないかくもん

ししんでんだんてい

ひわだぶき

承明門は、元々は平安宮内裏の内郭門の一つで、紫宸殿南庭の南におかれた檜皮葺の門でした。中世に一度廃絶しましたが、儀式に用いる重要な建造物として、寛政度の御造営において再び建てられました。現在は、安政度に建てられた五間三戸、一重、瓦葺、白壁に木部は丹塗りの門となっています。儀式では、公卿らの参入口として使用されるなど、重要な役割を果たしていました。



承明門南側から紫宸殿を望む

承明門と紫宸殿に掛けられている扁額は、木製で、題字の周りに装飾が施されており、平安時代後期の宮中および民間の行事を画いた『年中行事絵巻』の中にも見られ、その様式は当時から大きく変わることなく継承されています。現在伝わっているものは、装飾部分に「うんげんさいしき纏綯彩色」が施されています。纏綯彩色とは、同系統の色が濃い色から淡い色へと順に配された伝統的な技法です。ここではさらに、纏綯彩色を色相的に拡張した「こんたんりよくし紺丹緑紫」の技法が使われています。青と赤、緑と紫などの対照の色相を交互に並べるもので、互いの色を引き立て合うとされています。

承明門の扁額の色は、制作当時の設計図(下に掲げた【資料】)によると題字面が胡粉塗、そこから外側に丹、黒、金、紺青、黄、緑青、白緑、胡粉、朱、墨、金と、細かく色が分かれていました。現在は、経年による色の変化もあり当初とは印象が異なるかもしれませんが、青や緑などの鮮やかな色は残っており、その風格を保っています。

現在の「承明門」と「紫宸殿」の扁額は、それぞれ享和3年(1803)に掛けられ、嘉永7年(1854)の火事による焼失をまぬがれたものです。題字は書博士の岡本保考が担当しました。

ここで紹介した扁額「承明門」を「京都御所 宮廷文化の紹介」<平成30年秋>にて展示します  
日時:平成30年11月1日～5日 場所:京都御所 大臣宿所  
※なお、承明門は工事中につき現在御覧いただくことができませんが、来春の工事完了後、参観ルートから御覧いただけます。



扁額「承明門」寸法:116cm×83cm



扁額「紫宸殿」寸法:137cm×100cm



【資料】内裏承明門額図

(都立中央図書館特別文庫室所蔵)

※画像の無断複製や二次使用を禁じます。

ごかじょうのごせいもん  
五箇条御誓文

明治元年3月14日(1868年4月6日), 明治天皇は紫宸殿に出御し, 百官を率いて天神地祇を祀り, 五箇条からなる新方針を誓約されました。

この儀式では, 神座を紫宸殿母屋西側(『明治天皇紀附図』画面奥)に設け, 公卿や諸侯(藩主等)は母屋, 殿上人は南廂に衣冠姿で着座しました。

天皇は, 副総裁三条実美・同岩倉具視等を従えて出御し, 母屋中央の御座に着御されました。御座は四季屏風に囲まれた平敷(厚畳と御茵)です。

天皇が出御されるにあたり, 紫宸殿上の常設の御座である御帳台を撤収したうえで平敷に着御されたこと, 天神地祇に誓いを立てる方式とされたこと, 何より武家と同席されたことなど, これまでに例のない形式が用いられました。

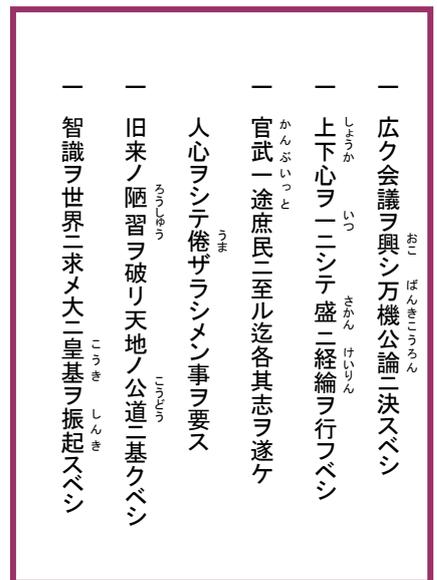
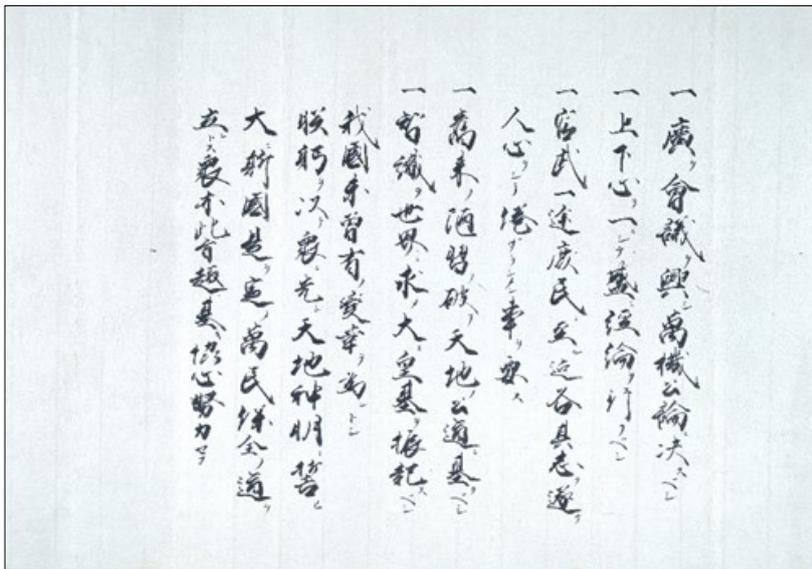
儀式では, 三条実美によって祭文が奏され, 神座の前で天皇御拜の後, 実美が御誓文を奉読しました。続いて, 実美を筆頭に列席者が一人ずつ中央の座に進み出て, 神位および玉座を拝した後, 誓詞に署名しました。当日出仕しなかった者も日を追って署名し, 合わせて767名もの署名が行われました。儀式終了後, 五箇条御誓文は, 広く国民に向けて公布されました。

五箇条御誓文は, 近代国家を目指す新しい日本の幕開けを内外に宣言するものであり, 儀式の在り方もそれを体現するように, 伝統を踏まえながら, それまでにない新しい形式を取り入れたものとされたのです。

京都御所には, 歴代の天皇の御物が収められている御文庫(東山御文庫)があり, 五箇条御誓文と百官の署名のある誓詞は, 現在もその中に収蔵されています。



五箇条御誓文(御物『明治天皇紀附図』)



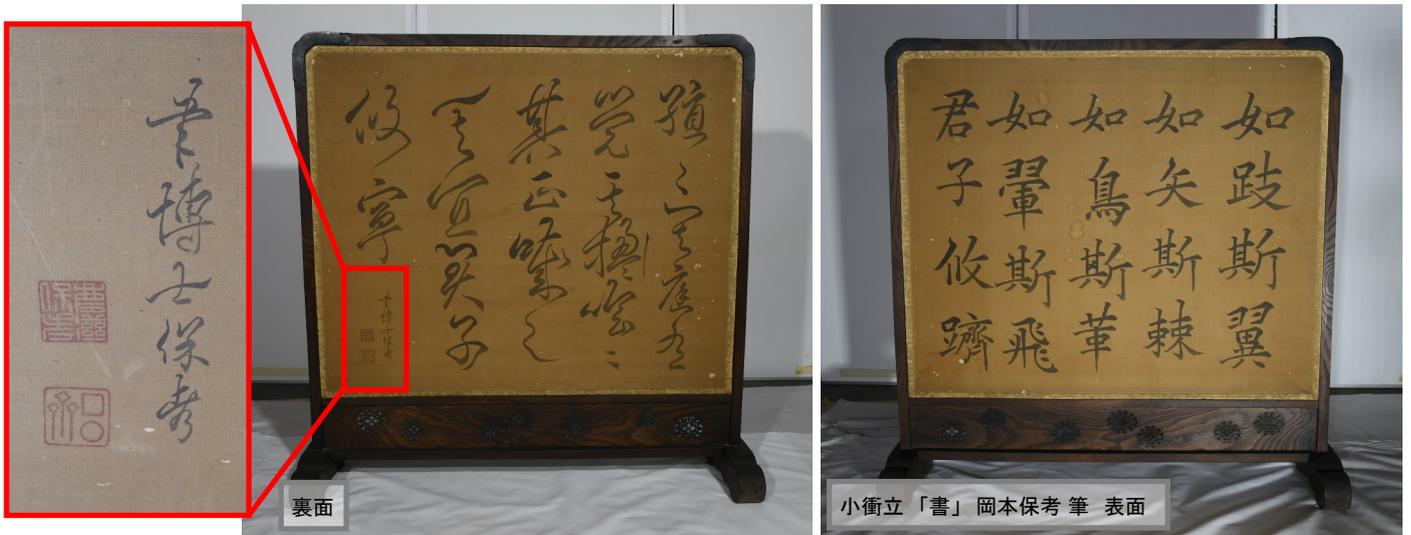
ありすがわのみやかひとしんのう  
御物『五箇条御誓文』御筆: 有栖川宮幟仁親王

「京都御所 宮廷文化の紹介」<平成30年秋>にて, ここで紹介した『明治天皇紀附図』と『五箇条御誓文』の写真を紫宸殿前に展示します



おかもとやすたか  
岡本保考(1749-1817)は、上賀茂神社の神職である賀茂<sup>あがたぬし</sup> 県主<sup>しよだいぶ</sup>の出で、一条家の諸大夫をつとめました。方円齋(表記は□○齋)と号し、花山院常雅から書の流派の一つである大師流を学び、安永8年(1779)に書博士に任ぜられています。その後、天明7年(1787)の光格天皇の大嘗祭では、当代随一の書の名手のみが書くことを許された大嘗会悠紀主基屏風本文の清書を担当したことをはじめとして、重要な書を多く書きました。

現在も京都御所には、岡本保考が書したものが残されています。今回ご紹介している紫宸殿、承明門の扁額のほかに、紫宸殿の賢聖障子<sup>けんじょうのしょうじ</sup> ([其の十四](#)で紹介)の色紙形に書かれた賢人たちの功績を記した文章、京都御所に伝わる衝立があります。ここでは衝立をご紹介します。



「書」と題された小衝立には、中国最古の詩集である「詩経」の小雅「鴻雁の什」から「斯干」全九章のうち、第四章と第五章が書かれています。前半の章が楷書で書かれているのに対し、後半の章は反対の面(裏面)に草書で書かれています。

〔表面〕 如跂斯翼，如矢斯棘，如鳥斯革，如翬斯飛，君子攸躋

(読み) つまだ ここ よく ごと や ここ きよく ごと とり ここ かく ごと きじ ここ と ごと くんし のほ ところ

〈意味〉 宮殿の全貌はつま立つ人のように端正莊嚴で、屋根は両肘を張って立っているようである。

宮殿の四隅が角立ち、棟がまっすぐであるのは矢が飛ぶようである。破風の下端は、鳥が翼を広げるようである。

色彩があって華麗な庇は、五色の雉が飛び立つようである。此の新殿が君子ののぼるところである。

〔裏面〕 殖殖其庭，有覺其楹，噲噲其正，嘒嘒其冥，君子攸寧

(読み) しょくしょく そ てい かく そ えい あ かい かい そ せい かい かい そ めい くんし やすん ところ

〈意味〉 殖殖たる其の庭，覺たる其の楹有り，噲噲たる其の正，嘒嘒たる其の冥，君子の寧ずる攸

平らかな宮殿の庭，高大な堂中の柱，広々と明るい表座敷，深々と暗い奥座敷，君子の休息して身を安んずる処である。

高大で壮麗な新しい宮殿をたたえ、天子がこの新殿にのぼって政治を為さることを祝禱する詩です。岡本保考が寛政度内裏造営前後で活躍したことから、この衝立は寛政度内裏造営の際に書かれ、新造内裏の完成を祝し製作されたものと考えられます。

# 《京都》御所と離宮の栞(おり)



其の二十一

京都御所では、平成31年3月12日(火)～21日(木・祝)の期間に、天皇陛下の御即位30年を記念して、「御即位30年記念京都御所特別公開」を行います。特別公開に合わせて、本号は展示に関連した内容としています。

## けんじょうのしょうじ 賢聖障子



狩野典信・住吉広行・住吉弘貫筆 岡本保考書 案本武雄模写 九面 絹本着色 縦244.5×横261cm

京都御所において最も格式の高い正殿である紫宸殿しんてんでんには、賢聖障子が立てられています(栞其の十四)。賢聖障子は、天子を支える名臣の図で、母屋と北廂もや きたびしの間に立てられ、中央に天子を象徴する霊獣である獅子・狛犬ぶぶんきと負文亀(神亀文を負って出現した瑞祥を表すという亀)が、その左右東西に中国の殷から唐時代にかけての賢人、呂尚りょしょう(太公望)や諸葛亮しよかつりょうなど併せて32人が画かれています。人物の上部には色紙があり、各賢人の功績が書かれています。中国では古くから儒教思想により、徳の高い君主の元には功臣が集い、君主もまたそれを重んずべきことを説き、功臣を壁画に画きました。日本においても、平安時代から画かれてきた伝統的な絵画です。

寛政2年(1790)の造営時は、狩野典信かのうみちのぶが下絵を画きましたが、絵の完成を見る前に没したため、さらなる考証を加えて後任の住吉広行すみよしひろゆきによって引き継がれました。これらの大部分は嘉永7年(1854)の大火による焼失を免れ、安政2年(1855)の造営では広行の息子である住吉弘貫すみよしひろつらが一部を修理、獅子・狛犬と負文亀の一面を新たに製作して使用されました。色紙の文字は、承明門と紫宸殿の扁額を書いた書博士岡本保考おかもとやすたか(栞其の二十)が担当しています。現在紫宸殿には、障壁画原本保護のため、昭和41年から45年にかけて画家の案本武雄まつもとたけおが模写したものが立てられています。

本年行われる即位礼正殿の儀に際し、紫宸殿に置かれていた高御座と御帳台が東京・皇居に移動されており、紫宸殿内部が見渡せるこの機会に是非御覧ください。



母屋より賢聖障子を望む



獅子・狛犬・負文亀



けんじょうのしょうじ

# 賢聖障子に画かれている賢人 一張良一



紫宸殿の母屋中央にある高御座の後ろには、賢聖障子が立てられています。賢聖障子は、中国の賢人が画かれている襖障子で、母屋と北廂の間にはめ込まれています。南面の9間の中央には獅子・狛犬と負文亀ふぶんき（神亀文を負って出現した瑞祥を表すという亀）が画かれ、他の8面には柱間1間につき4名の賢人が画かれています。人物の上部には色紙があり、賢人の名前や功績などが書かれています。一方、障子の北面（裏側）には、にしきかちょう錦花鳥（写真：右）が画かれています。



賢聖障子は嘉永の大火による類焼を免れたので、安政度御造営の折には寛政度にひろゆき住吉広行によって画かれた障子の一部を住吉弘貫が繕いひろつら使用されました。現在の紫宸殿には昭和41～45年にかけて模写されたものが置かれています（寛政度に製作された賢聖障子は京都御所内収蔵庫で保管）。



賢聖障子に画かれている張良(中央)

この賢聖障子に画かれている賢人のうち、張良について紹介したいと思います。

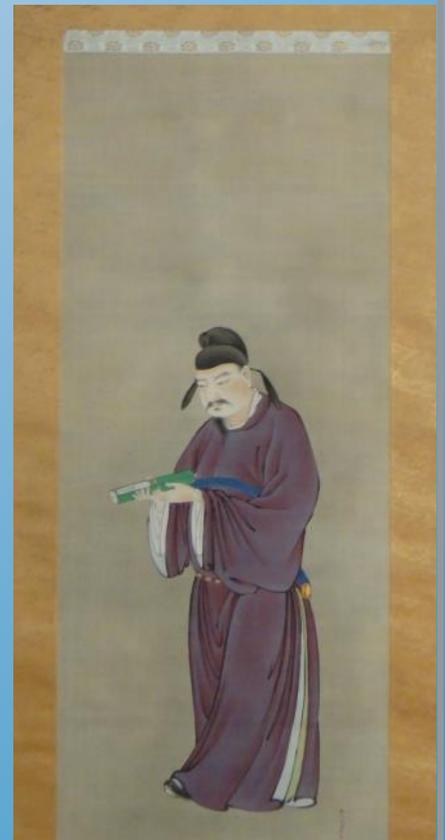
紫宸殿母屋の東から2間目の面の右から3番目に画かれている人物が張良です。蕭何、韓信と共に「漢の三傑」の一人に挙げられる張良は、韓の再興をおこなうため始皇帝の暗殺を目論むが失敗し、改名して逃亡を試みました。その後、黄石公から太公望の兵書を授けられ、劉邦を支え漢の高祖の臣となったということで有名な人物です。

賢聖障子の他に張良を画いた障壁画として、参内殿の東御縁座敷にある「黄石公」という画題の杉戸絵があります。ある日、張良は老人に出会います。この老人は、自分の脱げた沓を張良に拾わせ、さらに沓を履かせるように命じます。張良がそれに従うと、後日改めて会う約束をして去ります。約束の日、張良より先にその場に来ていた老人は、張良が遅れたことに怒り、後日会う約束をして再び去ります。三回目にやっと、張良が先に来て待ち構えていると、老人はそれを喜び、太公望の兵書を授けました。張良は暇さえあればそれを読み、後に漢の名臣となりました。この兵書を授けた老人が黄石公で、杉戸絵(写真:下記左)には前段の黄石公(画面右)の脱げた沓を張良(画面左)が差し出す場面を画いています。

京都御所には、張良を画いた掛け軸もあります。(写真:下段右)巻物を持った張良の姿が描かれているこの掛け軸は、木挽町狩野家七代目の惟信によるものです。惟信は養川院などと号し、江戸時代中期から後期にかけて幕府の御用を勤めるなど活躍しました。



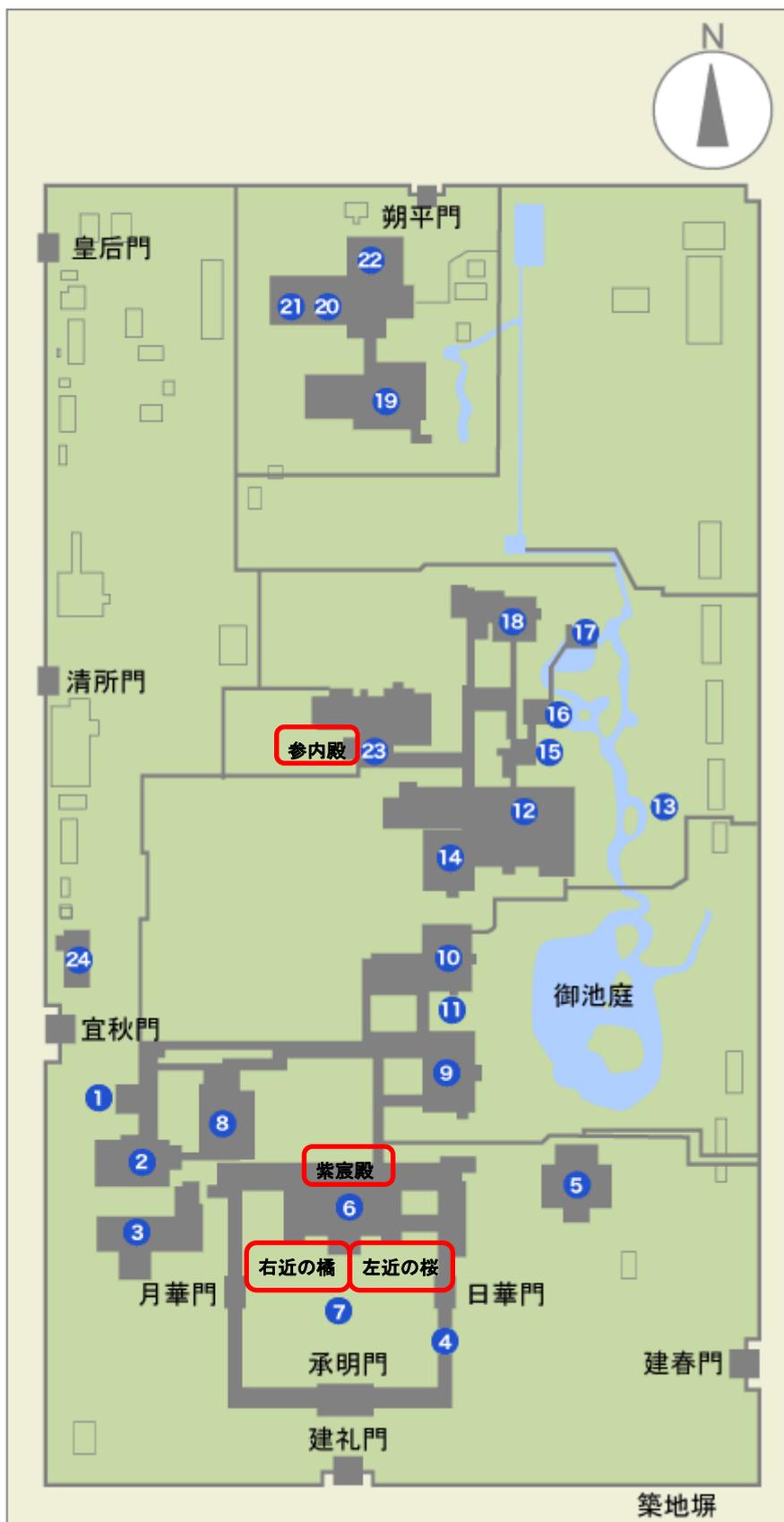
参内殿東御縁座敷「黄石公」画:大角南耕



掛け軸「張良」画:狩野惟信

# 京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



**観**マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、 <http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

**通**マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、 <http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの [こちら](#) からご覧ください。

<問い合わせ先>  
 〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所  
 代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215